佳作 僕に憧れているその子へ

イマム　ククー　プラダナ
IMAM KUKUH PRADANA
国　　籍　インドネシア
職　　種　たて編ニット生地製造
実習実施者　岩田ニット株式会社
監 理 団 体　協同組合 CEO

僕が日本に行って一番待っていた時間は週末でした。なぜなら、しばらく作業を休めるだけでなく家族に電話をかけ、何かを話し合えるからです。特に母でした。ある冬の夜「ダナに憧れている人がいるよ」母に言われました。その子は彼の母親に「ダナさんのように日本で働けるようにしっかり勉強しなくちゃ」と言っていたそうです。それを聞いた途端、僕は笑ってしまいました。「どうして僕に憧れるのか？」と母に返事しました。

電話を切ってから、まるで悪い知らせを聞いたかのようにぼーっとしていました。母に問い直した、「どうして僕に憧れるのか？」その言葉を考えた時、ふと昔の自分を思い出しました。「You Tube」を見て日本に勤めているインドネシア人の投稿を見ていたからです。その動画では良い生活が映っていて、「やりたいな」と思うようになりました。あの時の僕は今の僕に憧れる子と一緒かもしれません。

それ以来、僕は一生懸命日本語を勉強し、日本で働きはじめました。しかし、日本では全然違いました。先輩と後輩関係の文化や、速い仕事のリズムや、間違えると注意されるなどでした。全ては「SNS」で現れません。僕自身も深く調べようとはしませんでした。

これは当然のことであり悪いことではありません。もっと良い経験をした人もいれば、そうでない人もいます。しかし、日本で働く人として寂しさや単調な生活を感じることもあります。また、同僚や上司から厳しくされることもあります。それでも、強くいなければならないと感じました。

辛いことを通じて、僕は目標のない高校卒業生から責任のある大人になりました。たとえば上司に怒られる前までは、日付を書き違えるのはたいした問題ではないと思っていました。けれど、そんなことはないと気づきました。怒られれば怒られるほど気づいたことが増えてきました。僕の上司も仕事がとても速い人でした。僕はリーダーシップとは良い手本を示すことだと分かりました。

「SNS」には、「今日また注意された。大人の生活ってしんどいな。」とは絶対に書いてありません。例えあっても、僕ならその苦しみを心の奥に保存するんです。誰も知らない方がいいと思います。多分僕に憧れるその子は「SNS」がきっかけでしょう。幸せそうに見えますが、実際はそれだけではありません。

憧れるのが僕なんて相応しくないと思いますが、もし描いていたものと現実がかけ離れていたらどうなってしまうのかが心配になりました。しかしもし本気で目指すのであれば、光だけではなく、裏にある影の苦労や努力も知ってほしいと思います。楽しい生活ができるからでなく、家から離れて働くことで、彼がより大きく成長することを願っています。